

ディキンソンの“Dropped into the Ether Acre—”について

——伯爵様はどなたですか？——

萱 嶋 八 郎

エミリ・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830—86) の短い詩の中でも特に短い、僅か8行の“Dropped into the Ether Acre—” (No. 665)⁽¹⁾が、今まで研究者の注意をとくに引く事はなかったと思われる。手元にある研究書に当たった範囲で言えば、分析を試みたものは皆無で、多少とも言及しているものが僅か三冊に過ぎない。しかもそれは軽く触れているに過ぎない。⁽²⁾この詩の中で注意を引いた唯一のものは、「ダイヤモンドの鞭」 (“Whip of Diamond”) と言う表現の面白さだけのようである。

この詩のモチーフは、一見したところでは、語り手の「冥界 (underworld) 降り」である。しかしこの詩を注意深く読んだ時、「冥界降り」の背後に語り手の「霊魂の上昇」のモチーフも見えてくる。前者は死であり、後者は再生である。この詩の見事さは、下降が即上昇であり、上昇が即下降である事、つまり死即生であり、生即死であって、死と生が一つである事を、僅か8行の詩の中に、簡潔に、見事に表現し得た事であろう。

ディキンソンの詩の中で、殆ど誰の注意を引く事もなかったと思われるこの詩を、敢えて取り上げる気になったのは、この詩の中で語り手が一体誰であるのか、語り手の正体を探って見たい事と、語り手が会いに行く「伯爵様」 (the Earl) は一体誰なのか、と言う謎を解いてみたいと思ったからである。この小論は、ディキンソンの他の詩と比較して、この詩が、彼女の詩の中で特異なものであることを明らかにし、ディキンソンの詩を理解する一つの手掛かりとする事を目指したものである。

I

最初にこの No. 665 の詩の全文を掲げたい。

エーテル地帯に落ちた、
芝士の衣をまとっている。
永遠に変わらぬレースのボンネット、
凍り付いたブローチ。

ブロンドの馬よ、銀の馬車よ。
手荷物は革紐で縛った真珠！
下りの旅行よ、ダイヤモンドの鞭よ！
馬車に乗って、伯爵様に会いに行く。

Dropped into the Ether Acre—
Wearing the Sod Gown—
Bonnet of Everlasting Laces—
Brooch—frozen on—

Horses of Blonde—and Coach of Silver—
Baggage a strapped Pearl—
Journey of Down—and Whip of Diamond—
Riding to meet the Earl—

この詩から「冥界降り」の背景を取り除き、第8行目の語り手が「馬車に乗って、伯爵様に会いに行く」（“Riding to meet the Earl”）点だけに注目すると、「伯爵様」が語り手の恋人で、語り手が「伯爵様」に会いに行く詩と考える事は可能であろう。仮にそう考えた場合は、この詩を愛の詩として読む事となる。

「伯爵様」が恋人と考えると、この詩の語り手の女性は、自ら積極的に馬車（“Coach”）に乗って、男性の伯爵様に会いに行く。ディキンソンの「愛」の

詩の中で、特徴的な事の一つは、勿論時代を考慮すれば当然の事ではあるが、語り手の女性が全く受動的な事である。すぐに思いつく二三の例をあげれば、あの広く知られた“Wild Nights—Wild Nights” (No. 249) では、語り手は「あなたに」 (“thee”) に会う事を強く願いながら、自らを強風の夜に港から出航出来ない船に譬えている。“He put the Belt around my life—” (No. 273) や “I am ashamed—I hide—” (No. 473) では、語り手の女性は、身分の高い男性に花嫁に選ばれた事にひたすら感激し、羞じている。これらの詩では、男性に対する語り手の女性の受け身の姿勢が特別に強く印象づけられる。語り手の女性が自らを「弾を込めた銃」に譬えた、ディキンソンならではの特異な詩、“My Life had stood—a Loaded Gun—” (No. 754) では、語り手の女性は、“Owner” が自分の所有物と認めるまでは、ひたすら隅に立って待っている「弾を込めた銃」である。

またディキンソンの詩には、「愛と死」を詠ったと思われる詩が幾つかある。この場合にも、語り手である女性は男性（死）に対して受動的である。一例をあげれば彼女の詩の中で最も広く知られたものの一つの“Because I could not stop for Death—” (No. 712) がそうである。語り手の「私」 (“I”) は、青年紳士に譬えられた「死」 (“Death”) が、デートの誘いに来るのをひたすら待っている。

これに反して、No. 665 の詩の「伯爵様」を、恋人であると同時に、仮に冥界の主、または No. 712 の青年紳士の「死」と同じと考えた場合、No. 665 の語り手の、死に対する積極的な態度に驚かされる。

II

以上の事を念頭に置いて、この詩を細かく検討して見たい。第一行で、語り手は「エーテル地帯に落ちた」 (“Dropped into the Ether Acre—”) と語っている。更に第二行で、「芝土の衣をまとっている」 (“Wearing the Sod Gown”) と言っている。冥界降りは、同時に靈魂の上昇である。死は「降下」の動きであると共に、「上昇」の動きでもある。上下反対の動きが同時に起こ

る事件である。

「エーテル」は語源的には「燃える、輝く、明るい」の意味であるが、詩語として「晴れた空、青空」の意味で使われる。古代の宇宙観では、月の宇宙空間の上の空域を満たしている元素である。「エーテル」は惑星や恒星の構成物質で、火、土、空気、水の四大元素と異なる、地上の土や空気よりも純粋な第五の元素である。このエーテルが充満している空間は死者の靈魂が昇っていく所であり、死者の靈魂が変容する所でもある。「エーテル」は近代の化学・医学では、アルコールに硫酸を加えて蒸留した時に生じる無色の揮発し易く、燃えやすい液体で、麻酔剤・溶剤として用いられる。

「エーテル地帯に落ちた」事は、語り手が死んで、魂が天に上昇した事を暗示する。この詩で言う「死」は勿論、比喩的な死で、人格の変容を指している。「天への上昇」に加えて、近代の薬剤としての「エーテル」に麻酔の働きがあった事を考慮すると、この人格の変容が、神秘的なエクスタシー状態の中で起こったと考えられる。「落ちた」(“dropped into”)とあるので、この「エーテル」地帯へ落ちた事が、予期しない、突然起こった事であると分かる。語り手は、思いがけない時に、突如として、忘我脱魂・エクスタシーの状態に入ったと言っている。

第二行に「芝土の衣をまとっている」とある。語り手は、「芝土」(“Sod”)で作られた「衣」(“Gown”)を着ている。この場合、“Gown”は女性のフォーマル・ウェア、礼装の意味に解する事は可能であろう。礼装は聖書では、浄化と新生を意味する⁽³⁾。また特別な衣を着る事、例えば婚礼衣裳、死装束の様な特別な衣服を着る事は、着ている人が人生の新しい段階に入った事を示す。

“under the sod”が「(死んで)葬られた」事を意味するのであるから、「芝土の衣をまとった」事は、「芝土」の下にいる、つまり死んだ事である。この詩で、墓地に植えられている「芝土」(“Sod”)は死の換喩である。語り手が「芝土の衣をまとっている」のは、語り手が墓地に葬られた事である。語り手は死んで浄化され、新しく生まれた、換言すれば語り手の人格は全く新しいものに変容した。

洋の東西を問わず、冥界は地下にある。第二行では語り手が死んで葬られ

た。「冥界へ下降」した。一方植物の緑は一般には、母なる大地の豊穡と生命を表す。冬に枯れた葉が死を表すとすれば、春に緑色になる葉は再生を表す。「芝土の衣をまとった」事は死と共に生を身に付けた事を意味している。

第一行の「エーテル地帯」は明の世界を意味し、第二行の「芝土の衣をまとろう」事は、地下の暗の世界を示す。明は意識の世界、暗は無意識の世界を表す。語り手は、明と暗、意識と無意識、生と死の彼岸の世界に突如として入った事になる。

第三行で、語り手は「永遠に変わらぬレースのボンネット」(“Bonnet of Everlasting Laces—”)を被っている。頭に被るものは、頭の換喩であり、頭は知性と精神の換喩である。頭に被るものは、被っている人の思考の内容を表す。レースに限らず布は一般に不死を表す。従って、「永遠に変わらぬレース」は、一種の類語反復となる。女性の帽子は男性の兜に置き換えることが許されるであろう。聖書では、兜は救済の象徴である。第三行は永遠の救い、永遠の生を言っている。語り手の精神は不死、永遠の生命、救済で説明される。

第四行では、「凍り付いたブローチ」(“Brooch—frozen on—”)を身に付けている。ブローチは女性の胸に付ける。ブローチは胸の換喩であり、胸は心臓の換喩、心臓は感情の宿る所である。帽子が知性の換喩で、ブローチは感情の換喩である。「凍り付く」の元の意味は「水が氷に変わる」事である。氷は冬と死を象徴する言葉である。しかし水が永遠に氷のままにいる事はない。氷は僅かな熱で水に帰る。水が生命であれば、氷は死である。しかも一時的な死である。語り手の感情は一時的に死んでいるが、知性は冴えて、生きている。これが「エーテル」の地帯に落ちた語り手の精神の状態である。

III

第一連で語り手が死と再生、暗と明、無意識と意識を超えたエクスタシーの状態に陥ったとすれば、第二連で語り手はこのエクスタシーの状態の中で、静止せずに動いている。「伯爵様」の所に向かって進んでいる。

第五行で、語り手は「ブロンドの馬よ、銀の馬車よ」(“Horses of Blonde

—and Coach of Silver”)と言っている。第五行から、この詩は俄に神話的な様相を呈してくる。馬は象徴的には、生と死の双方の両義的な意味を含んでいる。古代の神話は、有翼の馬が太陽の戦車を夜間に引くと伝えている。その時馬のイメージは生命と結びつく。馬は夜間の暗闇の中で、死んだ太陽を明るい昼間の世界に運んで太陽に生命を与える。馬はまた地下の動物で、暗闇に生まれ、冥界で死者の霊を運ぶ動物である。この時馬のイメージは死と結びつく。人が見えない暗闇の中でも、馬は人を目的地に運んでくれる。馬は天界でも、冥界でも人の魂を運ぶ動物である。

「ブロンドの馬」(“Horses of Blonde”)とは、どのような馬と解すべきか、読む者が迷うところである。文字通りに取れば、“blonde”が金髪で肌が白い女性を指す言葉であるので、「ブロンド」の馬は「白い雌馬」である。太陽神ヘーリオスの車を引くのは、白い馬で、生命を表す。『ブロンドの馬』を『ヨハネの黙示録』の「青白い馬」(pale horse)と取れば、「青白い馬」は「死」を乗せた馬である。⁽⁵⁾この馬は生命に導く馬であり、死に導く馬である。

神話に出てくる車は一般に、二輪または四輪の古代の戦闘用・レース用の車(chaiot)を指すのであって、この詩の「馬車」(“Coach”)ではない。旧約聖書のヨシュア王が焼いた「太陽の車」も“chariots”である。⁽⁶⁾「車」(chariot)は古代宗教では神々の乗り物であり、神々は車に乗って、天上も冥界も、縦横に駆け巡った。車はまた象徴的には魂の乗り物である。この詩の場合、“chariot”の代わりに、“Coach”が用いられている。この第五行の“Coach”の文字通りの意味は霊柩車の意味であろうと想像出来る。そしてこの詩の場合“coach”を“chariot”と入れ換えて読む事が許されるであろう。“Coach”は語り手の魂を乗せて、冥界と天上の世界を旅する。

この詩では「馬車」は「銀の馬車」である。一般に、金は太陽を表し、銀は月を表す。ギリシア神話の月の女神アルテミスは、馬と関係の深い女神とされている。語り手は、ある意味で自分を幾分かアルテミスと同一化している。第一行の「エーテル地帯」は、宇宙の区分けでは、月のある区域よりも上の区域である。その意味で「銀の馬車」は月の区域から上昇している。一方、金は昼を表し、銀は夜を表す。「銀の馬車」は月の馬車で、夜の暗黒の世界を旅する

車である。月の世界は闇の死の世界である。一方「エーテル地帯」は、月が存在する世界よりも、さらに上に存在する明るい空の世界である。「エーテル地帯」は死んだ魂が、暗黒を越えて赴く場所であると共に、魂が新しい世界に入る為に必要な変容をする、再生の場でもある。

また銀は人間の魂で、金は神の霊である。その意味でも、銀の馬車は、語り手の魂を乗せて進んで行く。キリスト教の象徴体系で、金はキリストで、銀はマリヤである。この詩では、真珠と銀とダイヤモンドは語り手の所有物であるが、語り手は金を持っていない。この事は、語り手は金を手にする事で、人格的に完成する事を暗示している。これから会いに行く伯爵が金を所有しているのか、或いは男性の伯爵が金その物であるのか、何らかの意味で伯爵が金と関係していると想像することは許されよう。これは金と銀の婚姻・死の婚姻を暗示している。

第六行で、「荷物は帯紐で縛った真珠」(“Baggage a strapped Pearl—”)とある。語り手がこの旅行に持参する荷物は「真珠」(Pearl)だけのようである。「真珠」は典型的な女性を飾る宝石である。同時に「真珠」は人の魂、それも浄化された魂を表す。語り手は「真珠」だけ、つまり浄化された魂だけを持って、「伯爵様」に会いに行く。最終的に語り手は「伯爵様」にお会いする事で、救済され、完成する事が暗示されている。

また「真珠」は月や月の女神を表象する。キリスト教会の象徴体系で、「真珠」は聖母マリヤであり、マリヤの胎内にいるキリストである。聖書は「天の王国」の表象であり、⁽⁷⁾『ヨハネの黙示録』では、最後の審判の後に出現する新しいエルサレムの12の門は、それぞれ一つの真珠で出来ている、⁽⁸⁾と言っている。

その「真珠」は革紐で縛り付けられている。そして紐や綱は、梯子や階段と同じく上昇と関係のある言葉である。

第七行で、「下りの旅行よ、ダイヤモンドの鞭よ」(“Journey of Down—and Whip of Diamond—”)とある。“Journey of Down”は「下りの旅」、冥界への下降の旅である。しかしこの“Down”という言葉には「下降」だけではなくて、「羽根」の意味もある。古代神話の太陽の車は、翼を付けた馬に引かれていた。翼を付けた馬は、馬車を引くと共に、空を天翔ける。従って、“Jour-

ney of Down”は「下りの旅」であるが、翼のある馬が馬車を引いて飛ぶ、天上の世界の「羽根」による旅行である事も暗に示されている。「下降の旅行」であれば語り手は冥界に降って行った事になるが、「羽根の旅行」であれば語り手は「天界を上昇する旅」をしている。

語り手が手にしているものは「ダイヤモンドの鞭」(“Whip of Diamond”)である。馬を叩く「鞭」(“whip”)は、棒の先に付いた革または紐であるので、このダイヤモンドの意味するものが象徴的なものである事は明白である。「鞭」は古代世界以来、権威の象徴であった。ギリシャ神話のゼウス、ポセイドン等の男性神だけではなく、古代中近東で崇拝された女神イシュタル、ギリシャ神話の女神ヘカテ等の女神達も権威の象徴として「鞭」を持っていた。

「ダイヤモンド」が象徴するものは、不変性と堅牢性である。王者の威厳と権威の象徴であるが、キリスト教会の象徴体系ではキリストを表す。キリストは神であり、創造主の神と人間との仲介をする神である。ダイヤモンドの鞭を持つ事は、キリストの仲介を頼りとして、創造主の神に会いに行くとも考えられる。そうであれば、これは救済の完成と考えられる。

ダイヤモンドは不変の愛の象徴である。女神と同一化した語り手は、不変の愛の思いに駆られて、馬に鞭打ち、馬車を進めている。

第八行で、「馬車に乗って、伯爵様に会いに行く」(“Riding to meet the Earl”)と締め括っている。この一行だけを読めば、「伯爵様」は語り手の恋人である。前述の様に、ディキンソンの愛の詩では、語り手の女性は常に受け身であった。この詩が冥界の世界の旅の詩であると考えれば、「伯爵様」は冥界の主ハーデースである。ハーデースはデメテルの娘・ペルセポネーを強引に地下の世界に連れ去った。母デメテルはペルセポネーを探す旅に出て、結局はペルセポネーは一年の三分の二は地上で過ごし、三分の一は地下で過ごす事になる。この詩の語り手がペルセポネーと異なるのは、語り手は、自ら積極的に伯爵様に会いに行く。語り手は、ペルセポネーの母デメテルとも異なる。デメテルは娘を探しに、あてどなく旅に出る。一方語り手は、目標を定めて直進している。冥界であれ、天上の世界であれ、そこに車で疾駆する女神は、神話の中には適切な例が見当たらない。アルテミスは月と関係のある

女神であるが、アルテミスは狩猟の神で、彼女が駆け巡るのは地上の山野である。アルテミスは処女神にして多産・豊穡の神と言う矛盾した性格を持っている。動物の保護者、守り神で、狩猟の神である。粗野で乱暴な性格は、馬車を走らせるのには相応しいが、男性を求めて動き廻る女神ではない。

ディキンソンの詩には、定まった象徴体系があるわけではない。ある一つの詩で使われたシンボルが他の詩に機械的に使われることはない。「伯爵」の言葉は、ディキンソンの詩の中で11回出てくるが、語り手の恋人としての「伯爵様」が言及されているのは、No.213, “Did the Harebell loose her girdle” だけである。この詩では、語り手は受動的なペルセポネーの様に受動的で、伯爵様は彼女を強引に冥界に連れ去るハーデースを連想させる点が無いわけではない。恋人としての「伯爵様」に喜んで会いに行く語り手は、寧ろ天上の世界に引き上げられて、キリストに会うキリスト教徒を思わせる。ただ天国のキリストは王であって伯爵ではない。天の王国に入る事が許された信徒が、馬車に乗ってキリストに会いに行く事はない。キリストが彼らを招き寄せる筈である。

この詩では語り手が伯爵様に会いに行く。この語り手に一番近いのは、強いと言えば、エロースを探しに行くプシュケーであろう。E・ノイマンは、「娘が母親から離脱するための決定的な第一歩は、娘が男への愛のために母権的な世界を見捨てて、死の婚礼のうちに男に進んでおのれをゆだねることにある」と言っている⁽⁹⁾。この詩の第一連で語り手は死とそれを超えた再生の世界にいる。第二連で語り手は一人で婚礼に向かって進んでいると考えられる。一人で行くのは、母権的な世界からの離脱のしるしと考える事は可能であろう。

IV

結論として語り手はペルセポネー、アルテミス、プシュケー、マリヤ、人(女性)の魂、天国に入ったキリスト教徒等のどれにもそっくり該当しないが、しかしその性格の幾分かを備えている。伯爵様は恋人、ハーデース、エロース、神の霊、キリスト等のどれにも該当しない。しかしそれらの性格を幾分か備え

ている。第一連に見た様に、語り手の人間の魂は、神秘的なエクスタシーの中にいる。第二連で語り手は、神的な性格を備えた男性・神の霊と出会おうとしている。出会った後で、語り手はその神的な存在と合一し、それを自らの人格に統合したと推測する事は許されるであろう。それによって語り手は人格が成熟し、成長した。この詩はその体験を語ったものであろう。

男性にとっても、女性にとっても、昼と夜、上と下、父権的意識と母権的意識といった対立要素が結合して、それぞれ独自の生産性を発揮し、互いに補完し合い、実らせ合うようになってはじめて、全一性に到達することができるのである。⁽⁴⁾

とE・ノイマンは言っている。ディキンソンの詩の中の少なからぬものは、詩人の内面の成長の記録である。詩人は心理学者ではないので、自己の内面の記録を詩の形で表現した。それは単に詩人だけの個人的な特異なものではなくて、人間一般（少なくとも女性全体）に通ずる成熟の記録であったと考えるべきであろう。それだから、彼女の詩が全世界的に広く読まれるのであろう。

註

- (1) この作品番号は、トマス・H・ジョンソンの三巻本『エミリー・ディキンソン詩集』（1955）の作品番号を示している。以下同じである。作品は同詩集からの引用である。
- (2) 以下の書物が、この No. 665 の詩に言及している。
Farr, Judith. *The Passion of Emily Dickinson* Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1952.
McNeil, Helen. *Emily Dickinson* Virago, 1986.
Patterson, Rebecca. *Emily Dickinson's Imagery* Amherst : Massachusetts UP, 1979.
- (3) 旧約聖書『ゼカリヤ書』3章4節 新約聖書『ヨハネの黙示録』6章11節等。
- (4) 新約聖書『エペソ人への手紙』6章17節。
- (5) 新約聖書『ヨハネの黙示録』6章8節。
- (6) 旧約聖書『列王記Ⅱ』23章11節。
- (7) 新約聖書『マタイの福音書』13章44～46節。

- (8) 新約聖書『ヨハネの黙示録』21章21節。
- (9) エーリッヒ・ノイマン著松代洋一・鎌田輝男訳『女性の深層』紀伊国屋書店 1980
P. 171.
- (10) エーリッヒ・ノイマン前掲書 P. 131.